

平成26年度霞ヶ浦学講座 第11講 結果報告（要旨）

実施日時：平成27年1月18日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター2F会議室

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：30名

テーマ：「世界の湖沼と霞ヶ浦（比較湖沼学のスズメ）」

要旨：霞ヶ浦は平野部に取り残された海跡湖です。現在は首都圏の重要な水資源として淡水化され、堤防で囲まれ、流域人口が多く、産業が盛んで、森林率が低い等の特性があります。世界中で海跡湖は珍しくありませんが、霞ヶ浦ほど人工化され高度に管理されている湖は少ないのです。湖沼は水資源、生物多様性、水産資源、優れた景観など様々な恵みをもたらしますが、一方で流域を含む管理が難しい側面があります。湖沼管理という課題では、世界中で多くの調査研究や管理経験の事例が蓄積され、世界湖沼会議が情報交換の場になっています。茨城県の宝である霞ヶ浦の将来を考えていく上で、世界の湖の状況に学ぶことは大事で必須なことです。

世界の湖を成因で分類すると、火山湖、カルデラ湖、断層湖、構造湖、氷河湖、堰止湖、三日月湖、海跡湖などがあります。それらの湖が人間社会との関わりで様々な環境問題を抱えています。初代琵琶湖研究所長を務めた吉良童夫氏は、世界の湖沼の六大環境問題として、大量の土砂流入、水位低下（水量減少）、毒物質による汚染、富栄養化、酸性化、生物多様性の劣化（固有生物の絶滅や生態系の悪化）を挙げました。

フィリピンのラグナ湖、タイのソクラ湖、中国の洞庭湖などでは、流域からの土砂流入で浅くなり、透明度低下などの弊害が起きています。西アジアのアラル海はかつて世界第四位の湖面積を誇りましたが、流入河川からの大量取水で、湖の水位が低下し、地図上から湖が消えようとしています。北米五大湖の一部では、工業排水中の毒物質によって湖水や生物が汚染され、深刻な問題になりました。富栄養化の改善は、中国の太湖、滇池、北米五大湖の一部などをはじめ、人口が多い流域を抱える湖沼では、土地利用や産業構造などの流域管理を含めて困難な課題です。過度の魚類養殖は、中国の滇池、フィリピンのラグナ湖、インドネシアのサグリンダム湖などで大きな問題となりました。酸性化は北欧やカナダの湖沼で問題視されています。これらの湖沼環境問題の深刻化に加えて安易な外来種の移入によって、その湖沼固有の生態系が脅かされ、固有種の激減をはじめ在来種への影響を通じて生物多様性の劣化が懸念されている湖沼は、アフリカのタンガニーカ湖、北米の五大湖などです。さらに地球温暖化や気候変動が湖沼環境に与える影響も懸念されます。

これら世界の湖沼環境問題の多くは霞ヶ浦でも課題になっており、他湖沼の地域社会や行政はどのような対策を取ってきたかを情報交換し、方法論を学ぶ比較湖沼学的な視点は、今後重要になっていくと予想されます。また逆に、霞ヶ浦で培った優れた方法や取り組みを、世界湖沼会議への参加などの国際交流を通じて積極的に海外へ発信し、世界の湖沼環境の改善に貢献する機会が、今後増えることも期待されます。